

### 3. 回答結果と分析

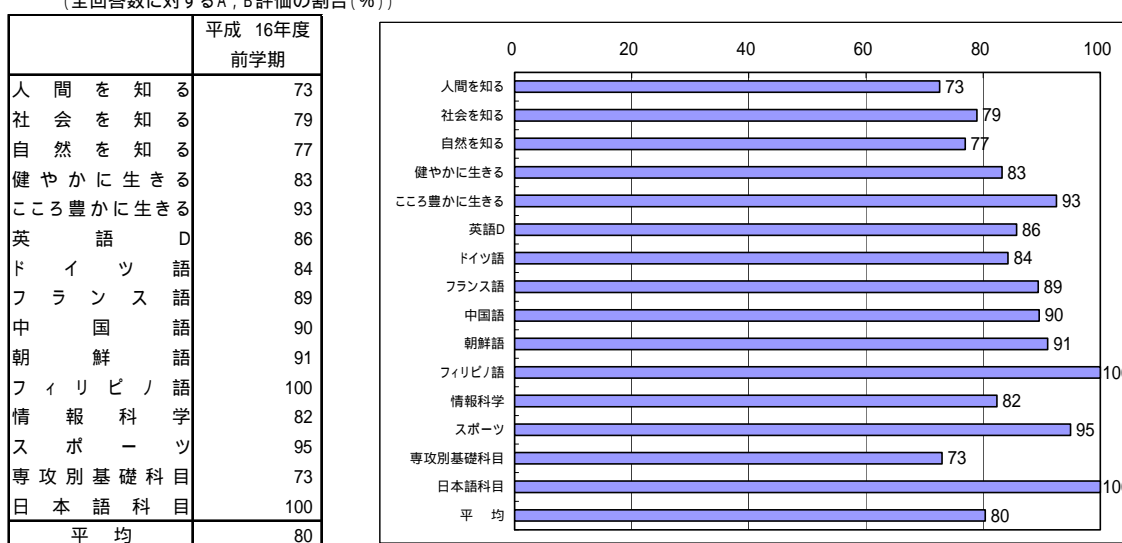
#### (1) まとめと分析

(2) 以下に示される平成16年度前学期の集計結果を、設問ごと4段階評価(授業のレベルのみ5段階評価)において、肯定的評価を下した学生の割合を示し、科目別の傾向を分析する。

#### 1) 「授業の内容に関する質問」に対する学生の自己評価

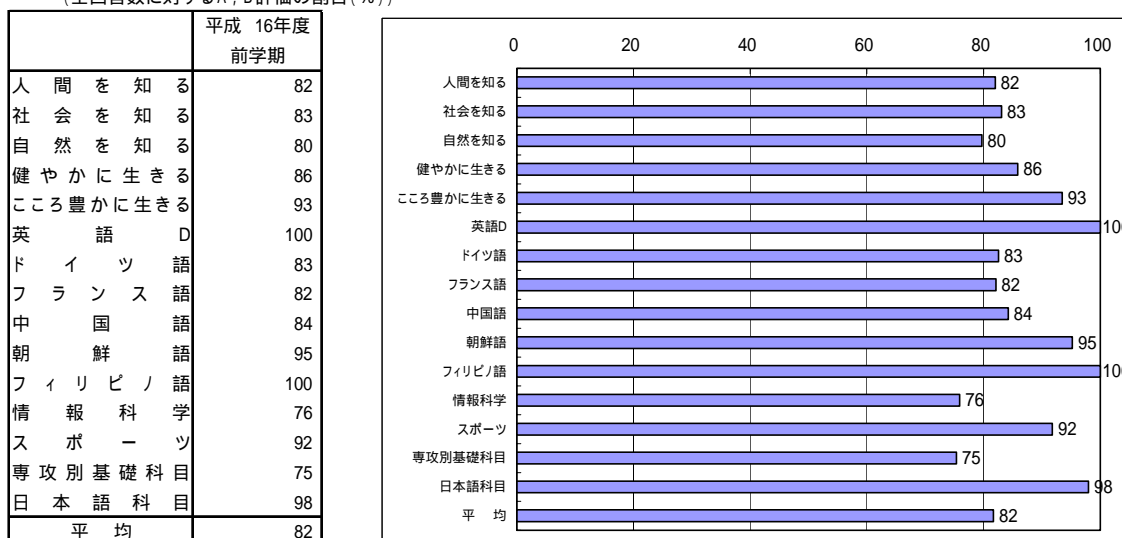
まず「目的・目標の理解」であるが、各科目とも70%以上の学生が肯定的評価を行っており、概ね学生は授業の目的・目標を理解できていると判断できる。授業の特色が理解しやすい「こころ豊かに生きる」や未習外国語の多くが90%程度の肯定的評価を得る。しかし「専攻別基礎科目」、「人間を知る」は73%に留まるなど科目間にばらつきがある。

表1 設問 1-1目的・目標の理解  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))



次に「進捗・時間配分」であるが、全科目70%を超え、全体平均でも82%の学生から肯定的評価を得た。個々の学生の習熟度や学習背景が異なることから、「専攻別基礎科目」と「情報科学」は進捗や時間配分に注意が必要となる。

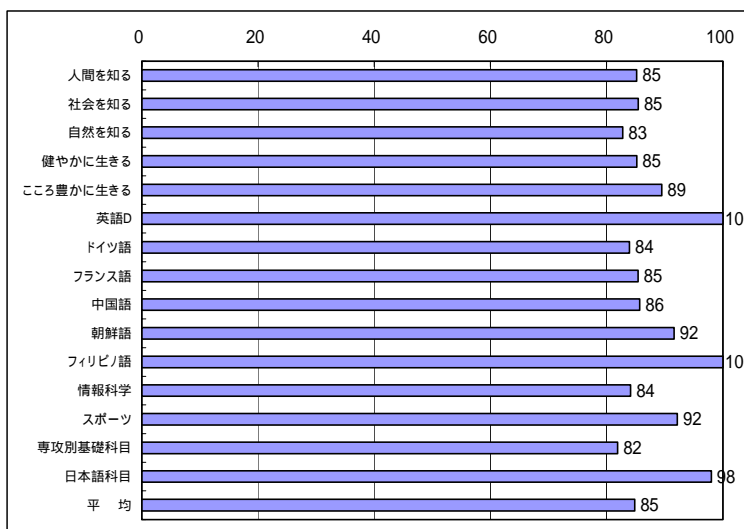
表2 設問 1-2進捗・時間配分  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))



「シラバスどおりの授業」については、全科目平均で85%、科目別でも80%を超えて科目間でのばらつきも少ない、肯定的な評価を得た。学生は、授業の進め方をシラバスから読み取り、その通り実践されていることが裏付けられたと判断できる。

表3 設問 1-3 シラバスどおりの授業  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))

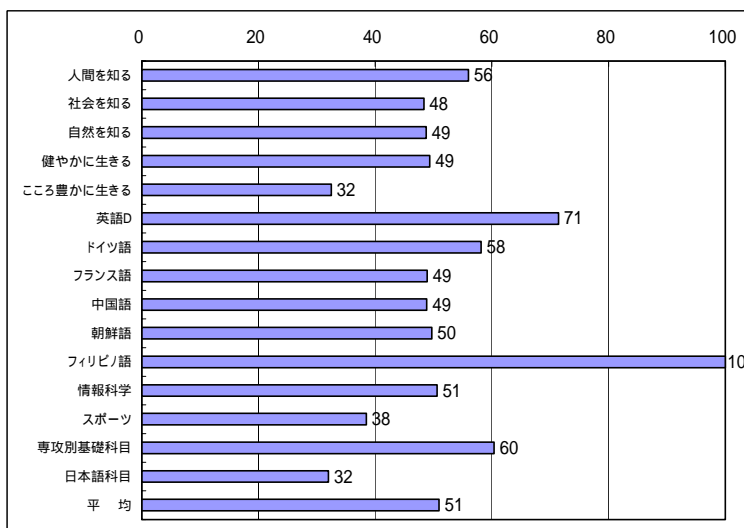
	平成 16年度 前学期
人間を知る	85
社会を知る	85
自然を知る	83
健やかに生きる	85
こころ豊かに生きる	89
英語D	100
ドイツ語	84
フランス語	85
中国語	86
朝鮮語	92
フィリピン語	100
情報科学	84
スポーツ	92
専攻別基礎科目	82
日本語科目	98
平均	85



「レベル」については、全科目平均で51%しか肯定的な回答を得られなかった。授業内容のレベルの評価が落ち込む要因は、学生の学習背景の多様化、大学における授業スタイルの未習熟、わかりやすさの欠如など様々な要因が複合的に絡むことが多い。そのため、授業内容のレベルは学生と教員のコミュニケーションにより臨機応変に対応することが求められる。

表4 設問 1-4 レベル  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))

	平成 16年度 前学期
人間を知る	56
社会を知る	48
自然を知る	49
健やかに生きる	49
こころ豊かに生きる	32
英語D	71
ドイツ語	58
フランス語	49
中国語	49
朝鮮語	50
フィリピン語	100
情報科学	51
スポーツ	38
専攻別基礎科目	60
日本語科目	32
平均	51

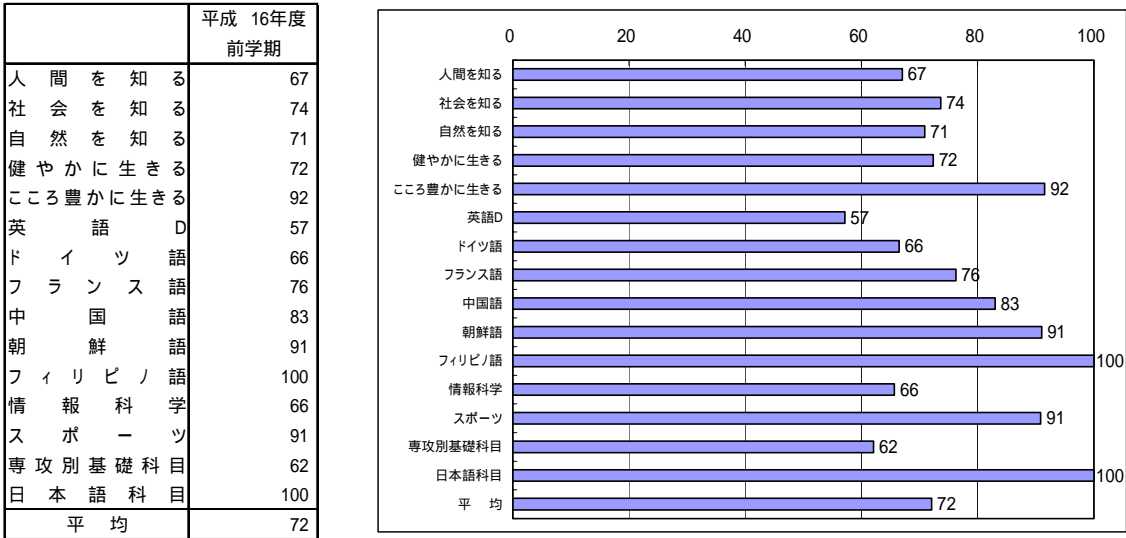


## 2) 「授業担当者の授業方法に関する質問」に対する学生の評価

まず「わかりやすさ」についてであるが、全科目平均では75%の肯定的評価を得るものの、科目毎のばらつきが大きい。わかりやすさに影響を及ぼす要因は大きく2つあり、授業内容そのものの難易度が高い場合と、授業における教授方法(テクニック等)に起因する場合が考えられる。「英語D」、「専攻別基礎科目」は授業内容の「レベル」(設問 )に対する肯定評価の割合は比較的高いことか

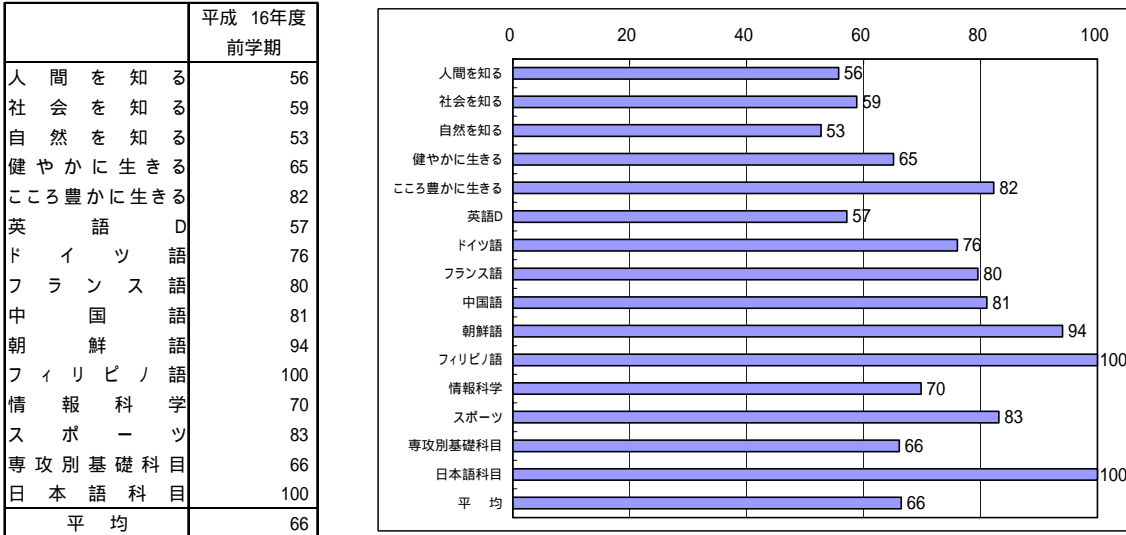
ら、後者に課題を抱えると考えられる。このため、今一層のわかりやすさに着目した取り組みに期待したい。

表5 設問 2-1 わかりやすさ  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))



「コミュニケーション」については、全科目平均の肯定的評価が66%であり、「人間を知る」、「社会を知る」、「自然を知る」の主題科目が60%を下回る結果であった。これらの科目は、これまでの授業スタイルや科目特性から、あまり学生と教員間のコミュニケーションが活発に図られなかった。しかしながら、学生のコミュニケーション能力の向上が社会的要請として求められていることから、授業における教員と学生両者のコミュニケーションのほかり方を今後のF Dの課題としたい。

表6 設問 2-2 コミュニケーション  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))

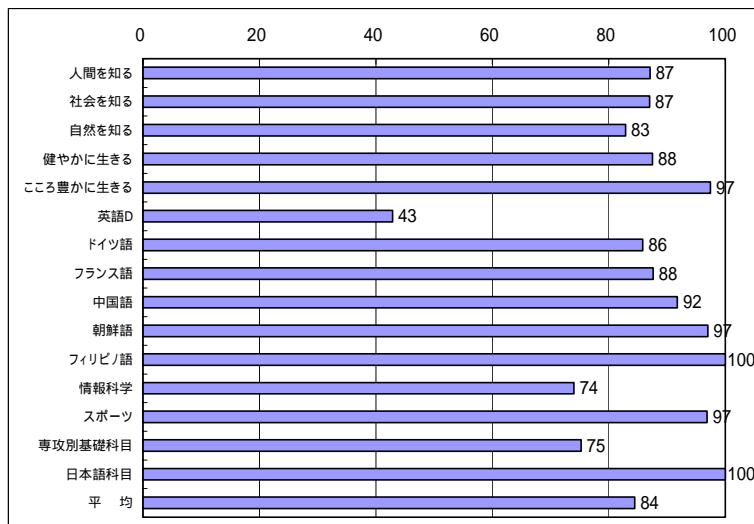


「教員の意欲・熱意」については、全科目平均の肯定的評価が84%であった。教員の「熱意」は学生に伝わってこそ教育効果につながるものであり、この評価がさらに伸びるよう期待したい。特に「英語D」、「情報科学」、「専攻別基礎科目」は昨年に引き続き低調であり、底上げのためには科目部会での検討が必要であろう。

表7 設問 2-3 教員の意欲・熱意

(全回答数に対するA, B評価の割合(%))

	平成 16年度 前学期
人間を知る	87
社会を知る	87
自然を知る	83
健康やかに生きる	88
こころ豊かに生きる	97
英語D	43
ドイツ語	86
フランス語	88
中国語	92
朝鮮語	97
フィリピン語	100
情報科学	74
スポーツ	97
専攻別基礎科目	75
日本語科目	100
平均	84

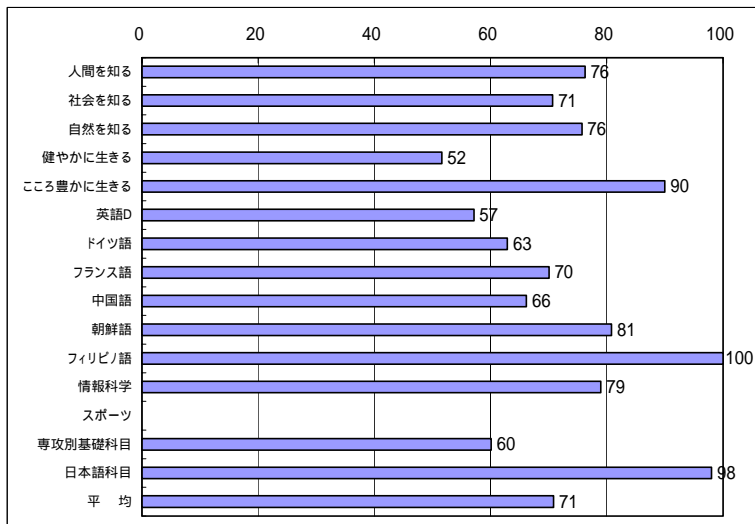


「視聴覚教材」は、学生の理解を促すため、授業の教授手法の一つであるビデオ・コンピュータ機材を効果的に利用している確認する指標であり、全科目平均では71%の肯定的評価を得た。科目特性により視聴覚教材の使用に差異があることに留意する必要があるが、学生の理解を促す教材は積極的に使用すべきであろう。

表8 設問 2-4 視聴覚教材

(全回答数に対するA, B評価の割合(%))

	平成 16年度 前学期
人間を知る	76
社会を知る	71
自然を知る	76
健康やかに生きる	52
こころ豊かに生きる	90
英語D	57
ドイツ語	63
フランス語	70
中国語	66
朝鮮語	81
フィリピン語	100
情報科学	79
スポーツ	
専攻別基礎科目	60
日本語科目	98
平均	71

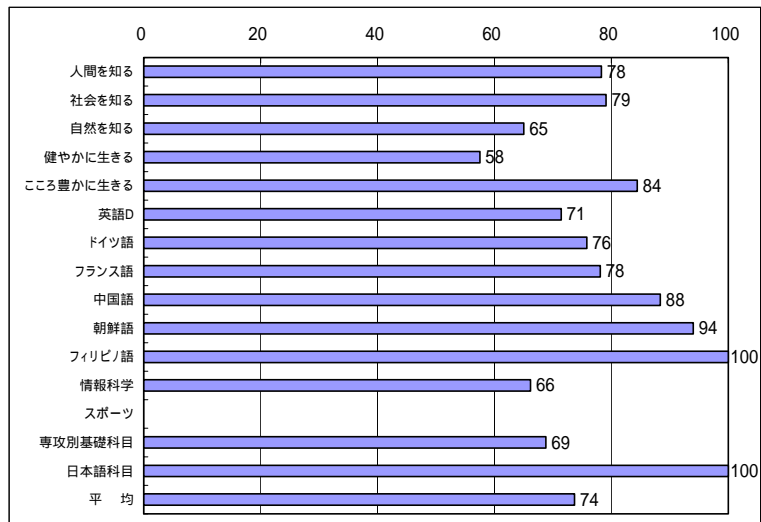


「教科書・プリント」については、全科目平均の肯定的評価が74%であった。学生から自由記入欄で指摘される問題の中に、シラバスに教科書を指定した場合は必ず授業中で使用し、その価値を説明して欲しいという要望が数多く寄せられる。このコメントを真摯に受け止め、シラバスに記載する内容に対して今後もしっかりとした説明が求められることを認識すべきであろう。

表9 設問 2-5 教科書・プリント

(全回答数に対するA, B評価の割合(%))

	平成 16度 前学期
人間を知る	78
社会を知る	79
自然を知る	65
健康やかに生きる	58
こころ豊かに生きる	84
英語D	71
ドイツ語	76
フランス語	78
中国語	88
朝鮮語	94
フィリピン語	100
情報科学	66
スポーツ	
専攻別基礎科目	69
日本語科目	100
平均	74



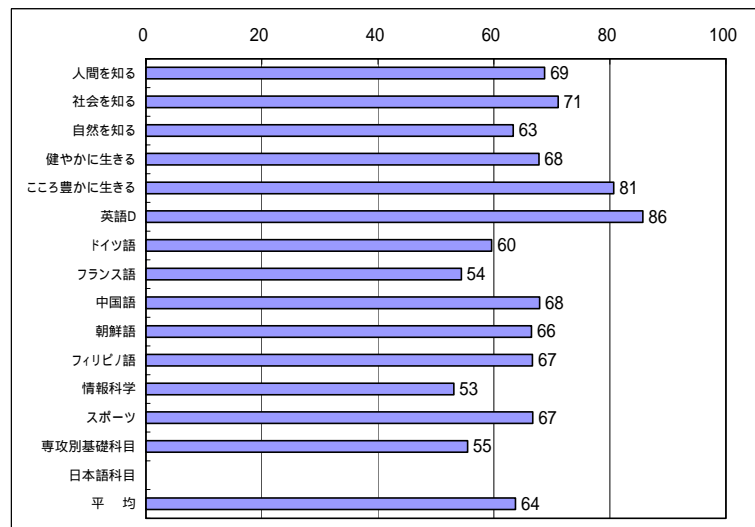
### 3) 「あなた自身に関する質問」に関する学生の自己評価

「シラバス」は、全科目平均で64%の肯定的評価であった。しかしながら、シラバスは学生との授業に関する契約と同等であるので、改善する余地が残されている。

表10 設問 3-1 シラバス

(全回答数に対するA, B評価の割合(%))

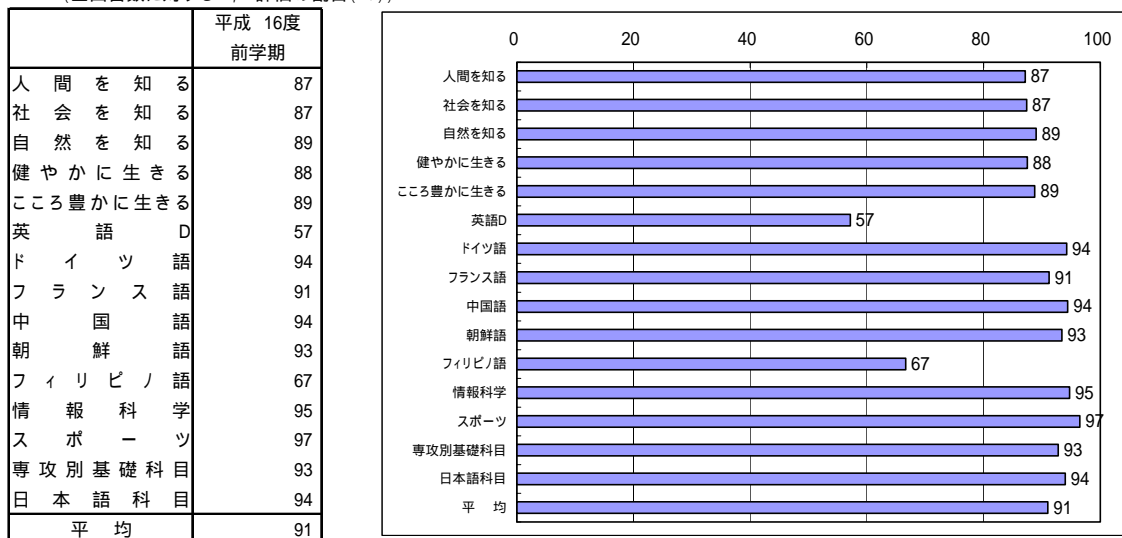
	平成 16度 前学期
人間を知る	69
社会を知る	71
自然を知る	63
健康やかに生きる	68
こころ豊かに生きる	81
英語D	86
ドイツ語	60
フランス語	54
中国語	68
朝鮮語	66
フィリピン語	67
情報科学	53
スポーツ	67
専攻別基礎科目	55
日本語科目	
平均	64



「出席状況」は全科目平均で91%であり、一部を除いてほぼ90%の肯定的評価を得ている。単位の認定の前提条件として80%以上の出席が求められていることから、これらに対する取り組みの成果と判断できよう。評価が低い科目のうち「英語D」は再履修科目であることから、予想される数字であるが、「フィリピン語」については見直しが必要であろう。

表11 設問 3-2 出席状況

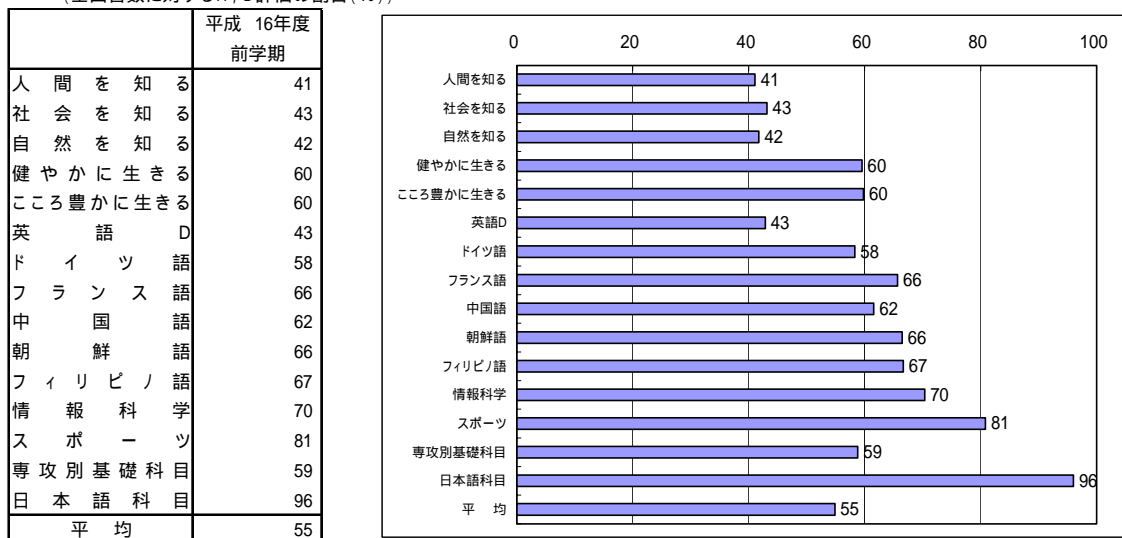
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))



「学習態度」については、全科目の肯定的評価は55%であった。特に「人間を知る」、「社会を知る」、「自然を知る」の主題科目群と「英語D」肯定的評価が50%を下回るなどあまり積極的に授業に臨んでいるとは言い難い状況にある。

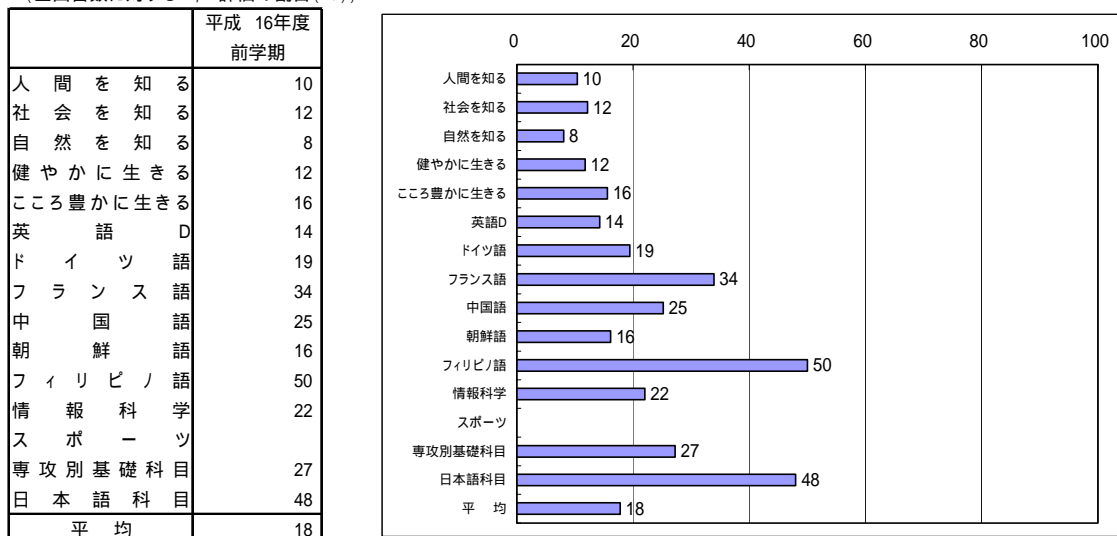
表12 設問 3-3 学習態度

(全回答数に対するA, B評価の割合(%))



「授業時間外学習」についてだが、授業科目毎に1時間以上行う学生の比率は18%であった。現行の単位制度は、「1単位は 教員が教室等で授業を行う時間及び 学生が事前・事後に教室外において準備学習・復習を行う時間、の合計で標準45時間の学修を要する教育内容を持って構成される」（「21世紀の大学像と今後の改革方針について」大学審議会答申）。そのため、自宅学習時間の取り組みが低いことは根本的な問題である。また、科目特性に応じた違いはあるにせよ、「自ら学ぶ」学生を育てるための工夫や仕組み作りは避けて通れない課題である。

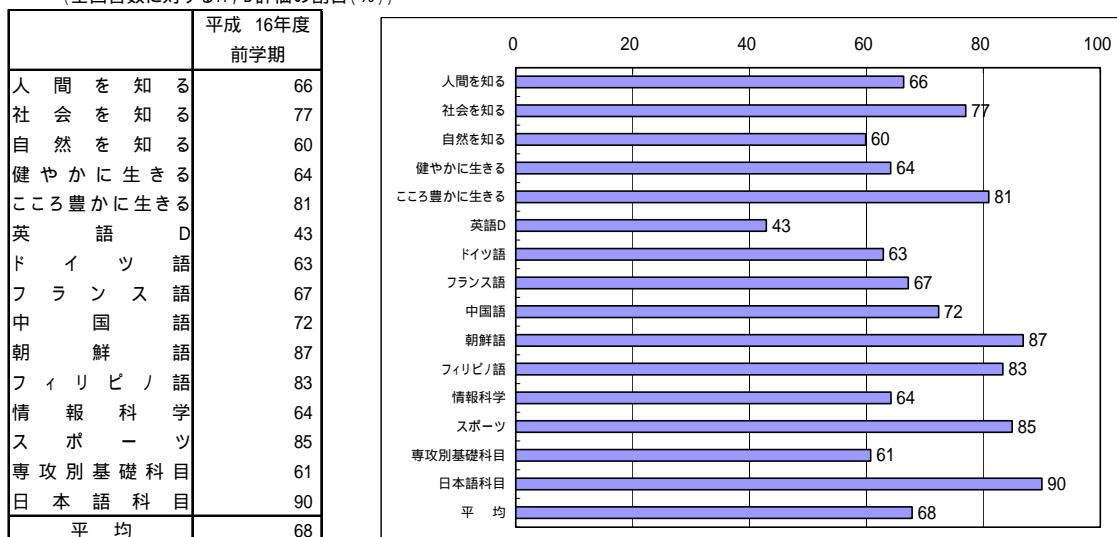
表13 設問 3-4 授業時間外学習  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))



#### 4) 「授業全体に対する質問」に関する学生の評価

「授業改善度」についてだが、学生の意見を取り入れるなどして授業を改善する努力に対し、科目全体で 68%の学生から肯定的評価を得た。昨年度までのアンケート結果に対して大幅に改善されており、教員の努力を称えたい。ミニッツノートや授業中のコミュニケーションによって学生から問題点を引き出し、教員がどのように問題点を認識し、改善に向けて対処するかということ、毎回の授業ごとに学生に伝えることが必要であろう。学生からすれば当該授業との出会いは一期一会の機会であることからすると、改善への意欲が彼らに伝わるよう工夫することは、教員としての責務であろう。これらの授業面での工夫で授業がさらに改善されることが理想であろう。

表14 設問 4-1 改善度  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))



「目的・目標達成度」は授業に対する目的・目標の達成度を質問しており、全科目平均では78%、科目間のばらつきがあるものの概ね全ての科目で70%の肯定的評価となった。実技を中心であり、授業の目標・目的が比較的明確な「スポーツ」、「フィリピン語」、「日本語科目」は100%に近い高評価になるのは予想通りだが、「人間を知る」、「社会を知る」、「自然を知る」の3主題科目や

「専攻別基礎科目」の評価も71%と高い。このことから、学生に対する授業内容の周知は充足され、授業の目的は満足できるレベルで達成されたと判断できる。

ただし、授業全体としての満足度は「英語D」と「専攻別基礎科目」で65%以下の肯定的評価であり、さらなる改善が求められよう。教養のありかたを論じる場合に、いたずらに学生の反応に振り回されてはいけないが、授業は受け手に受容されない限り、効果を期待することはできない。満足度やおすすめ度があまり高くない科目については、教育プログラムの面からも問題がないか、重い検討課題として受け止めなければならないだろう。

表15 設問 4-2 目的・目標達成度  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))

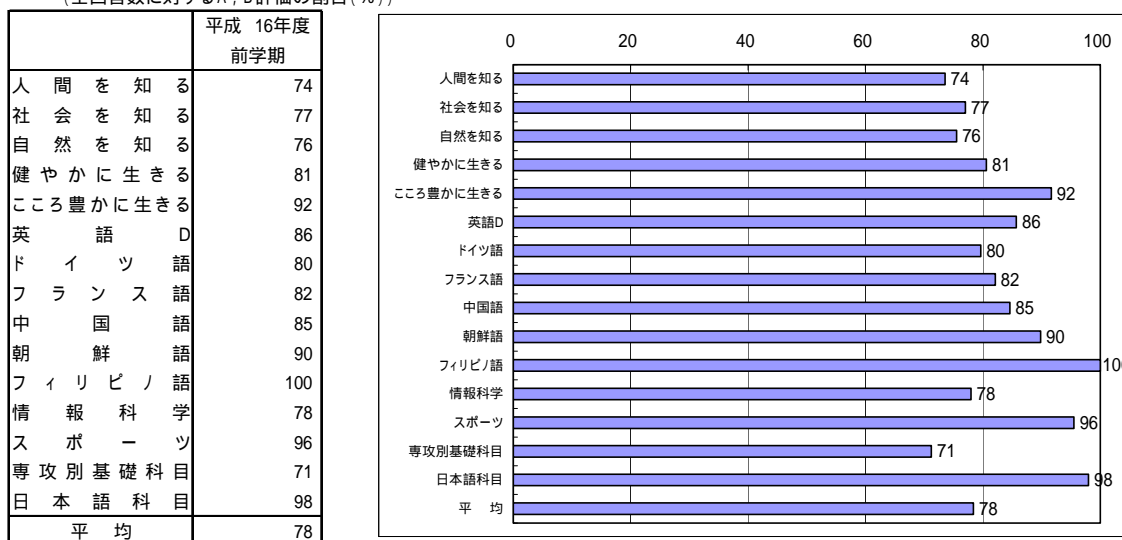


表16 設問 4-3 満足度  
(全回答数に対するA, B評価の割合(%))

